「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿とは？」

２歳児の姿からも感じられます

2020. 5.15　大分県教育委員会

CASE 19

2歳児

「B君も、乗りたいんだね。」

協力園
幼保連携型認定こども園
泉光こども園

（幼児の実態）

２月下旬、子どもたちは、自分のやりたい遊びを見つけ、友達と楽しむ姿が見られます。同時に、遊びに必要な物を自分で準備する際、同じ物に興味を示した子ども同士のトラブルも起きるようになりました。

ランニングバイクを上手に扱えるようになったA児たちは、友達とお気に入りのバイクに乗って楽しく遊ぶことで、関わり合う心地よさを感じているようです。

ピンクのランニングバイクを取り合うB児とC児

バイクを取り合う2人の子どもの話を聞く保育者と、その様子を見るA児

B児と保育者のやり取りを聞くＡ児

C児の様子を遠くから見守るA児

自分で考えて行動したが、涙ぐむA児

A児は、外遊びの時間になると、くまモンのヘルメットを取り、ピンクのランニングバイクに乗る準備ができています。

B児とC児は、ピンクのランニングバイクの取り合いになっています。B児は、C児が片方のハンドルを持っているにも関わらず、強引にバイクに乗ってしまいました。その様子を見ていた保育者は、ピンクのバイクと、B児が昨日遊んでいたブルーのバイクを近くに置き、子どもと同じ目線で話し始めます。

A児は、C児と一緒にピンクのランニングバイクに乗って遊ぼうとしていたのか、C児の傍で、保育者と話をしている2人の友達の様子をじっと見ています。保育者は、B児とC児、それぞれにどうしたいのかを聞きます。2人とも、ピンクのランニングバイクで遊びたいという気持ちを伝えています。保育者は、ブルーのバイクを見せながら話していますが、互いにピンクのバイクを諦めようとしません。納得いく方法が見つからず、2人ともしょんぼりしています。保育者は、C児の傍でずっと話を聞いているA児に、「Bちゃんも、Cちゃんも、ピンクのバイクが欲しいって。どうしたらいいか、相談するね。」と、伝えました。A児は一人で、バイクに乗って園庭に行きました。友達の話が終わるまで、バイクに乗って待つことにしたようです。

A児は、C児のことが気になったのか、一人でバイクに乗って遊んでも楽しくないと感じたのか、園庭から戻って来ました。B児が保育者と話しています。A児は、B児の表情を見たり、B児の気持ちを代弁する保育者の言葉を聞いたりして、B児もC児と同じようにピンクのバイクを使いたかったことを改めて感じたようです。A児は、話が終わらないことを察し、また園庭に戻ることにしたようですが、何度も立ち止まって、保育者とC児が話している様子を見つめています。

その後、A児は園庭に行き、一人でバイクに乗って遊んでいましたが、また、保育者の所に戻って来ました。「これ、いいよ。」と、自分の乗っていたピンクのランニングバイクを保育者に差し出しました。A児は、『自分はバイクに乗って遊んだから、今度は友達にあげる』ことにしたようですが、『C児と一緒にバイクに乗って遊びたかった』思いが、まだ残っているようで涙ぐんでいます。保育者は、今までのA児の行動や言葉から、A児の気持ちを察し、「Aちゃんは、ピンクのランニングバイクを貸してあげたいの？代わりばんこにしようと考えたの？」と、涙を拭っているA児を抱きとめました。A児は、保育者に言葉を掛けてもらい泣くのを止めて、自分でくまモンのヘルメットを片付けに行きました。

C児と遊ぼうとしていたA児は、遊具を取り合う友達の表情や、気持ちを代弁しながら話す保育者の言葉を見聞きして、友達の気持ちに触れる体験をしました。また、B児の気持ちに気付き、譲ることにしましたが、C児と遊べなかった満たされない感情も湧いてきました。その時に、自分の気持ちを温かく受け入れる保育者に支えられ、自分の決定を肯定する気持ちになったのではないでしょうか。

子どもは、保育者との安心した関係の中で、自己を発揮しながら現実の状況と折り合いを付ける経験を重ねていく中で、保育者の人と関わる態度を学び、自分も相手に対して同じように関わろうとしていくと考えます。

保育者の援助・環境構成のポイント

- 身近な人と関わる心地よさを感じる環境
  子どもの感情に対して、十分に時間をかけて受容的に受け止める保育者。一緒に遊ぶと楽しいと感じる友達。
  友達と一緒に遊びたいという意欲。
- 友達の様々な思いを感じられる環境
  子どもの思いを丁寧に捉え、代弁していく保育者。
  安心して自分の素直な感情を表出する友達。
- 自分の考えたことをやってみようとする環境
  子どもの行動や思いをありのまま認め、期待をもって見守る保育者。子どもが、自分で考え行動したことを認める保育者。

事例から見られる10の育ち

自立心

A児は、自らC児と関わったことで、同じ遊具を取り合う友達の思いを知る体験をする。どうすれば、みんなが楽しく遊べるか自分なりに考えたと思われる。自分のバイクを譲る選択に、葛藤があったものの、保育者から、自分の考えを行動に移したことを認められ、自分のしたことを肯定することができたと考える。

子どもは、主体的に遊びを楽しみながら、支えられたり、認められたりして、自分の力でやろうとする気持ちをもってくる。このような体験を重ねながら、達成感を味わい、自信をもって行動するようになっていくと考える。

事例から見られる10の育ち

道徳性・規範意識の芽生え

A児は、B児とC児の表情や保育者の言葉などを見聞きすることで、友達の思いを感じ取ったと思われる。保育者の受容的な言葉かけや、気持ちを尊重してくれる関わりをモデルに、相手との接し方を学んでいると考える。

子どもは、相手の気持ちに共感したり、状況を解決するために行動したりして、遊びを楽しく続けていく体験を重ねる。こうして、人間関係が深まると、不安定な感情をコントロールしながら、納得して折り合いを付け、遊びを楽しくしようとする姿が見られるようになってくる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「１０の姿」

協同性　／　**道徳性・規範意識の芽生え**　／　自立心

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。